

令和4年度 第2回
北海道立総合博物館協議会

議事録

日時：令和5年3月16日（木） 10時00分開会

場所：北海道博物館 講堂

令和4年度 第2回北海道立総合博物館協議会議事録

会議名	令和4年度 第2回北海道立総合博物館協議会
開催日時	令和5年3月16日(木) 10時00分～12時05分
開催場所	北海道博物館 講堂
出席者	<p>【委員】 大原昌宏委員(会長)、中村吉雄委員(副会長)、佐々木史郎委員、住吉徳文委員、中川充子委員、村木美幸委員、湯浅万紀子委員 以上7名出席</p> <p>【事務局】 石森秀三北海道博物館長、塩谷直樹文化振興課総括主査兼企画調整係長、伊藤雅大アイヌ政策課主査 ほか</p>
傍聴者	0名
議 題	(1) アイヌ民族文化研究センター専門部会について(報告) (2) 令和3年度協議会評価調書(案)について (3) 令和4年度事業経過(10～3月)について(報告) (4) 令和5年度北海道博物館年度計画について(報告) (5) 野幌森林公園エリアの活用及び北海道開拓の村利活用方針について(報告) (6) その他

※・単なる相づち及び言い直しなどは、原則として割愛する。

・内容に応じて《意見・提案》、《質疑応答》等の見出しを便宜的に作成した。

1 開会

甲地研究主幹：ただいまから令和4年度第2回北海道立総合博物館協議会を開催いたします。
開会にあたり、北海道博物館館長の石森より、一言御挨拶申し上げます。

2 館長あいさつ

石森館長：本日は、お忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。
(以下、あいさつ)

《配付資料の確認》

甲地研究主幹：続きまして、本日の配布資料の確認をさせていただきます。
(以下、配布資料について説明)

《出席状況の確認》

甲地研究主幹：まず、本日の出席状況について御報告いたします。本日の協議会は、定員7名中7名の委員に御出席いただいております。北海道立総合博物館条例第25条第2項にあります協議会開催の条件である委員総数の2分の1以上の出席を満たしており、本協議会が成立しておりますことを、御報告いたします。

3 北海道立総合博物館協議会委員紹介

甲地研究主幹：本日御出席いただいております委員の皆様の御紹介をさせていただきます。
(以下、名簿に沿って協議会委員を紹介)

甲地研究主幹：続きまして、北海道博物館の職員を紹介させていただきます。
(以下、名簿に沿って博物館出席者を紹介)

甲地研究主幹：続きまして、北海道環境生活部の職員を紹介させていただきます。
(以下、名簿に沿って本庁出席者を紹介)

《協議会の公開》

甲地研究主幹：なお、本日の協議会は、許可、認可等の審査、行政不服審査、紛争処理、試験に関する事務等、北海道情報公開条例第26条ただし書きの規定に該当する審議内容はございませんので、北海道立総合博物館協議会運営要綱第3条に基づき公開の取り扱いとさせていただきます。

甲地研究主幹：それでは、このあとの議事進行につきましては、大原会長にお願いします。よろしく願いいたします。

《会長あいさつ》

大原会長：大原でございます。おはようございます。開会にあたり、簡単に一言御挨拶申し上げます。

コロナの状況も明けたのか明けていないのかといったところですが、これが日常になってきており、大分制限なども緩くなってきました。といつつも、まだなくなったという訳ではないので、いろいろと気をつけなければなりません。まだまだ博物館関係者の皆様も大変な状況かと思えます。コロナの状況が落ち着いてきて、インバウンドも戻り始めており、そのような中でまた新しい年度が始まるのかと思えます。現在開催中の企画テーマ展「もっと！あっちこ

「つち湿地」展については、昨年度特別展で実施した際には会期中のほとんどが臨時休館になってしまい、職員の皆様も悔しい思いをしたと思いますが、企画テーマ展でのリバイバルということで、チラシをいただいて、コロナ前と比べて博物館の活動がだいぶ復活してきたなと思いました。

本日の主な議題は、お手元の次第にありますように、議題(1)から議題(5)までとなります。特に、こうした状況での来年度の年度計画も議題にございますので、よろしく御審議のほどお願いいたします。

最後に、議事の円滑な進行についての御協力をお願い申し上げまして、簡単ですが、御挨拶といたします。

4 議題

議題(1) アイヌ民族文化研究センター専門部会について

大原会長：それでは、議題に入ります。議題(1)「アイヌ民族文化研究センター専門部会について」、説明をお願いします。

甲地研究主幹：お手元の「資料1 令和4年度アイヌ民族文化研究センター専門部会議事録」を使って説明いたします。

(以下、資料1をもとに説明)

昨年度事業の評価に関することにつきましては、次の議題(2)でも取り上げます。そのほか、専門部会長でもある中村副会長の方から付け加えることなど、ございますか。

中村副会長：ありがとうございます。

今回の議題とは関係ありませんが、北海道大学において先住民族に関する不適切な発言がありました。それについて学長に会いに行きました。中村睦男元学長が、北海道大学はアイヌに対して取り組むことが責務だと過去に発言した〔H17年2月北海道大学総長ステートメント〕経緯を踏まえつつ、私は、こうした不適切な発言が出てくるとアイヌ・先住民研究センターがなくなるのではないかと、といったお話をさせていただきました。その中で、大学側は学生に対しても、アイヌ民族のことについて取り組んでいく、という発言をされました。いろいろな場面で「アイヌはいない」と言われているが、中村元学長が言われた、アイヌ問題に取り組むのは北海道大学の責務だということについて、引き継いでいきますとのことだったので、皆さんへの情報提供として発言をさせていただきました。

大原会長：ありがとうございます。ただいまの説明について、委員のみなさまから何か御意見などございますか。

(特になし)

議題(2) 令和3年度協議会評価調書(案)について

大原会長：それでは、次の議題にうつります。議題(2)「令和3年度協議会評価調書(案)について」につきまして、事務局より説明をお願いします。

甲地研究主幹：お手元の「資料2 令和3年度 協議会評価調書」を使って説明いたします。

(以下、資料2をもとに説明)

大原会長：ありがとうございます。黒字が前回の協議会で出た意見で、赤字が専門部会を経て追加された内容になります。これについて、何か意見はありますか。自身の御発言が記載されていることもあるかと思いますが、文面として意味が取れているかの確認もお願いいたします。

大原会長：専門部会で追加された「評価もやりすぎても良いと思っている。」については、「評価もやりすぎぐらいでも良いと思っている。」といった方が表記として良いかと思っています。

甲地研究主幹：ありがとうございます。いただいた文案の方が、より文意が通りますので、そのように変更いたします。

大原会長：他になければ、これをもって案を確定し、博物館側に本日付けで通知することにした
と思います。
(一同合意)

議題（3）令和4年度事業経過（10～3月）について（報告）

大原会長：それでは次に議題（3）「令和4年度事業経過報告」について、博物館からの説明をお願い
します。

池田学芸部長：お手元の「資料3 令和4年度事業経過報告（10～3月）」を御覧ください。
(以下、資料3をもとに説明)

大原会長：ただいまの報告について、次の議題の来年度の計画にもつながりますので、今年度の
報告についても、委員の先生からコメントいただければと思います。良い点や気になる点など
ありましたら、御発言をお願いいたします。

湯浅委員：御報告ありがとうございます。来年度の「行事あんない」のラインナップを見ただけで
もワクワクするような内容ですので、実施報告の際にも限られた時間ではあると思うのですが、
実際の手応えや反響についても報告していただければ、なおありがたく思います。例えば、記録
写真などをスライドショーで流していただくだけでも、展示やプログラムの様子がわかるので、
わかりやすいかと思いました。

池田学芸部長：ありがとうございます。

佐々木委員：いつもながら計画的に整然とこなしていますので、感嘆します。何点かお伺いしま
す。

まず、ロシアとの研究交流はどのような状況なのでしょう。全く通信が取れていない状況
なのか、担当者同士ではやりとりできているのか、その辺りの説明をお願いします。

また、コロナ対策の緩和がされてきて、タッチパネルやはっけん広場など徐々に運用してい
く、というのは、どういう形での運用なのか教えていただきたいです。

それから、解説員によるハイライトツアーも開催されていないということですが、当館はギ
ャラリートークも色々な機器を使い密にならないよう配慮しながら開催し始めていますが、そ
うしたかたちでも進められるかと思しますので、既に再開の目処が立っているのか、そうした
状況について教えていただければと思います。

小川学芸副館長：ロシアとの研究交流は、サハリン州との友好協定に基づいてサハリン州郷土博
物館との共同研究を進めてきたのですが、御指摘の通り、まずコロナによって関係が途切れ
て、またウクライナへの侵攻以降、日本との外交関係が厳しくなってきました。今年度の頭
くらいまでは、メールなどでの個別のやりとりはできていましたが、夏以降はメール
にも返信が来ない状況になってきており、この1年を通してみるとだんだん疎遠になってき
てしまっている状況です。もちろん、このままで良いということはないので、社会的な事情はあ
るにせよ、サハリンというお隣の友好関係が築ければ、それに越したことはない、北海道
のロシア課とも調整しながら意思疎通を図ることが重要かと思えます。

池田学芸部長：コロナとともにどう再開していくかということですが、2月から体験学習室であ
るはっけん広場のものづくりイベントを再開しました。少ない人数でかつ限られた日ではあり
ますが、まずそこから試してみるという状況観察中です。これだけ長くコロナ禍が続いてきた
ので、お客様がコロナ慣れしてきております。コロナを深く意識する方と、あまりそうでない

方々、さまざまにいらっしゃいます。そういったことも考慮しつつ、まずは安全性の確保をできるものから進めようという議論から始め、報告したような経過になっております。お客様だけでなく職員が混乱してもダメですから、そういう議論の中でメニューを段階的に決めていっています。今は第一段階というところで、2月上旬のはっけん広場の一部再開からはじめ、まもなく、展示場のタッチパネルなどを再開します。総合展示室第5テーマの「どんぐりコロコロ」は次の段階です。映像機器で詳しい解説をしている場所が多いので、それを触らないと展示の内容が伝わらないということもあり、その対策として進めたのが、抗菌フィルムの採用や、非エタノール系の除菌液などの、玄関や展示場入口への配置です。5月に国の方針も大きく動くようです。ハイライトツアーは第2段階か、第3段階か、ということになるかと思えます。なお、音声ガイドの機器貸し出しも再開しております。

大原会長：新しく刊行されたニッセイ財団助成の『北東アジアの十字路 北海道博物館展示案内』は販売になるのでしょうか。

池田学芸部長：今のところ販売の予定はありません。

曾根副館長：北海道に寄付していただいているので、道の財産となっており、販売するとなると手続きがいろいろ発生することになります。今のところは、学校や図書館等公共施設に配布して、そこで見ていただくという状況です。

大原会長：ありがとうございます。

議題（4）令和5年度北海道博物館年度計画について（報告）

大原会長：それでは次の議題（4）「令和5年度北海道博物館年度計画について」、博物館からの説明をお願いします。

甲地研究主幹：お手元の「資料4 令和5年度北海道博物館年度計画（案）」を使って説明いたします。

（以下、資料4をもとに説明）

次に次年度計画の内容について、今年度と事業計画が大きく異なる点、特徴的な点などについて、担当部長よりそれぞれ補足説明いたします。

池田学芸部長：（資料4をもとに説明）

島村総務部長：（資料4をもとに説明）

小川学芸副館長：（資料4をもとに説明）

大原会長：ありがとうございます。さまざまな内容がありますが、委員の皆様から御意見等ありましたらお願いいたします。

《質疑応答・意見1》事前評価の考え方について

大原会長：事前評価が全てAになっているというのは、計画として調整を経た上でのものだという考え方は分かりましたが、挑戦的なものがないという風に見えてしまいます。ちょっと頑張ればできることと、安全にできることなどの、分けもできるかとも思います。

石森館長：御指摘のとおり、必ずしもAをもらえないような、チャレンジングな内容があっても良いはずだと思います。

人間は凸凹あって、それも魅力ではありますから、そういった意味で、館長が言うのもおかしいことではありますが、違和感がありました。それぞれのところでもっと自由な発想があって然るべきだというのが、私の偽らざる所感です。

こうした点について、協議会の先生方からも御指導いただきながら、改めていければと思います。御意見よろしく願います。

大原会長：組織というのは、保守的になりがちなところが多いのですが、そうした点について外

部の委員として、忌憚のない意見をいただくことが健全なやり方かと思います。

住吉委員：私が拝見したときに、真っ先にそれを感じました。前回も同じような指摘をしたかもしれませんが、営利企業の立場としては、年度計画は大事なもので、当たり前に行えるものと、チャレンジしないとできないものと、達成していかないと変化が起きないものなど、計画に難易度があると思います。

計画を立てる段階で、大きな中期目標などの方針に沿っているかどうかは計画の妥当性としてあることですし、予算もありますが、実現の可能性がAとなると、やって当たり前なことなのだと思いますが、あまりにもチャレンジがないと思います。実現可能性があるのであれば、言葉が悪いかもしれませんが、ルーティンワークとして進めれば良いとも感じてしまいます。

計画を立てる段階で、何回も調整を繰り返していくプロセスは非常に大事です。計画自体の妥当性は全てAでないといけないとは思いますが。しかし、その計画の中身に、ABCがあるとすると、これはできて当たり前、これは負荷かかるもの、これはチャレンジングなもの、これができたら本当によくやったと言えるもの、そういう計画の評価のあり方はあると思っています。事前評価が全てAなのは良いのですが、計画の難易度を立てるということは大切だと思います。

中川委員：住吉委員の御発言に関連しますが、第1次自己評価の個別評価項目が4つあり、「中期目標・計画との整合性」「年度計画の適切性」「協議会評価意見の反映」の3つは、説明があったように計画を立てる中で担当と主幹が調整するのはその通りだと思います。一方で、「実現の可能性」だけは、ひとつひとつについて言えるものではなく、それぞれの項目の中で、これはできるだろう、これは難しい、ということに分けていくのが計画だと思います。その後の結果について、これはできて当たり前だったけどしっかりと行っている、これはチャレンジングだったけどよくできた、などここまではできたけどここまではできなかったという振り返りの自己評価にもつながります。特に「実現の可能性」については、一つの項目に対して一つの評価だけをつけるのは無理があるのではないかと思います。

湯浅委員：皆様の御意見とも重なりますが、資料としてこのように出てきた際に、口頭でプロセスの説明があると理解はできますが、今後も残ってしまうものなので注意した方がいいと思います。重点項目として、今までできなかったけれども、ビジョンに合わせた計画を立てて、今回はできた、ということがあれば成果として評価できるのではないかと思います。

大原会長：この自己評価を見たときに外部の人からすると、メリハリがなく、どこに力を入れているのかが分からなくなってしまうかと思いました。中期目標は、あくまで目標なので、全員が中期目標に向かっているとみんなで倒れてしまうかもしれません。7割くらいの人が同じ目標に向かって、あとの3割の人は普段は何をやっているかわからないくらいにして、何か事が起きた時にレジリエンスとして3割の人が働けるというような、大学と博物館は、行政機関とは違うので、教育にしても研究にしても余裕が見えるような組織の方が、外部からしたら安心できるかと思います。博物館が行政機関のようになってしまうと、お役所だからと言われて終わってしまいます。

学芸員の皆さんは最先端のことをやっていることが多いので、全員が中期目標に向かっているということはむしろ異常な事態かとも思いますし、できればABCが外から見てメリハリがあるような、例えばこの年はここに力を入れている、とか、長期的に5年あったらできるが、今年はまだCくらいで初期の達成度だ、ということがわかれば良いかと思いました。研究とか、コレクションのマネジメントなどは年単位で切っても仕方がないので、中長期的な目標の中において、この位置付けにある、ということが見えると、協議会としても安心したり、意見が言いやすくなったりするかと思います。

住吉委員：今年が目玉は何なのだろうというのが、気になりました。メリハリというか、これだけは絶対やるということがあって良いと思います。また、言葉尻の指摘で恐縮ですが、「概ね

妥当」と書くならば、Bだと思います。「概ね妥当」と書いておいてAというのは違うかと思
います。評価の表記についての指摘でした。

大原会長：評価の考え方ですので、事前に十分に調整したからAだというのは分かりますが、協
議会の先生は、さまざまな場所での経験がありますので、いろいろな考え方を指摘していただ
ければと思います。

《質疑応答・意見2》電気代等の社会的な影響に対する予算措置について

大原会長：北海道大学は電気代の高騰の煽りを受けていますが、北海道博物館ではそうした部分
の予算の反映への影響はありますか。

島村総務部長：関連するところとしては、「7 施設及び周辺環境の整備」の予算計上における
「北海道博物館管理運営費」の中に、「指定管理負担金」という記述があり、道から指定管理
者に対しての負担金として計上していますが、その中に含まれています。電気代の高騰につい
ては、令和3年度から続いていることから、それを考慮した予算措置になっていますが、全て
賄えるかはなかなか難しいところがあるかもしれません。例年ですと、電気代や燃料代の高騰
で予算に不足が生じた際には、道の補正予算により措置されるようになっています。

曾根副館長：今年度は電気代が非常に上がっていますので、3月の道議会の第5回定例会で電気
代等の補正を行い、道として指定管理者へ不足分を補うということになっています。

石森館長：電気代の高騰等についても指定管理者にとって負担になっています。指定管理者は北
海道の本庁と契約する形式で、諸々の仕事を行ってくれています。指定管理者が直面する仕事
上の問題点につきましては、我々から本庁に伝えていくこととなりますが、予算に関わること
は即時の対応が難しいこともありますので、その点は御理解いただきたいと思ひます。

《質疑応答・意見3》海外研究交流について

大原会長：先ほど指摘のあったロシアとの関係についても、計画に書いてあるのでしょうか。

小川学芸副館長：ロシアとの関係については、来年度中の再開は難しいという見通しを持った状
態です。直接的なコンタクトやコミュニケーションの再開は来年度中にはしたいと考えていま
すが、人の行き来は来年度中には厳しいかと考えております。

大原会長：それは実現の可能性が低いということで、Cにして表に出していただけると、現実が
見えてくるのかなと思います。情勢が変わることによって、実現可能性はないけれどやってみ
る、といったことも考えなければならぬかもしれません。

小川学芸副館長：そういう意味では、書かなかつたら評価の対象にならないので、あえてCなど
と表記して見えるようにしておくことで課題が見えるので大切かもしれません。

《質疑応答・意見4》博物館全体の評価の指標とアフターコロナについて

住吉委員：総括的なものになります。

一つは、北海道博物館の全体の評価の基準って何なのでしょう。例えば、企業だと売り上
げだとか、前職のサッポロビール博物館だと、来場者数だとか、物販の売り上げだとか、定性
的なものとしてはお客さんの満足度だとか、いろいろ基準がありますが、北海道博物館におけ
る今年うまくいったもの、いかなかったものなどの最終的な基準というのは何でしょうか。

また、企業はどこもそうですが、コロナ前とコロナ禍の3年間あって、今は人が動きはじめ
るようになって、例えば飲食事業などを見てみると、コロナ前に戻るかどうかという議論もあ
りますが、コロナ前を基準に物事を考えたら元には戻らないと経営者の方々はおっしゃって
います。まずは、人々の行動が変わってしまったということがあります。飲みに行こう、遊びに
行こうとなっても、その中での行動が変わってきている。それから、マスクを外しましょうと
言っても皆さん外せないということもあるでしょう。さらに、いろいろな意味で社会環境が変

わってきています。ロシアとウクライナのこともあったりして、全てのコストが上がっている、物が無いなど、以前は当たり前に入っていたものが手に入らなくなったり、値段が上がったりしています。コロナが明けたとして以前のビジネスモデルに戻そうと思っても、要素が変わってしまっているの、新しく考え直さなければならぬと経営の立場の方々を考えています。

博物館などの展示や行事などで文化を発信している場所においても、お客さんに来ていただいて、発信した情報を受け止めていただいて、感動していただくような場所ではありますが、今までどおりのやり方をしていても、せっかく良い情報発信をしようとしていても、それがお客さんの行動につながっていかないのではないかと感じています。

ではどうすればいいか、という答えはないのですが、そのように発想を変えて、それから先の事業の変化を起こしていかないとダメだなと、普通のビジネスの場でも思いますし、こういう博物館などでも発想を変えていかないといけないと最近強く思います。

石森館長：住吉委員の御指摘は重要なもので、私は10年館長を勤めていますが、私自身が非常勤であったり、指定管理者制度のように博物館だけでは決められないこともあったり、もどかしいところもあります。また、評価の問題も、言うまでもなく北海道の財政が厳しいので、年々のシーリングはあっても、お客様からの評価に合わせて予算がプラスになる、ということもすぐには難しい状況にもなっています。そこが、北海道博物館だけでなく、日本における文化政策や文化財行政、公共のサービスに関わる課題です。

博物館でさまざまな事業を頑張ってくれている若手の職員からすると、もどかしく思うところが多いです。ただ、これは当館だけでどうにかできる問題でもありません。その点も御理解いただければと思います。

大原会長：アフターコロナについて、池田学芸部長からの説明もありましたが、どういった形でコロナ前に戻すか、というのが計画の中では大きなものだったのだと思いますし、実際戻っていくのではないかという意識だったのですが、住吉委員の御発言にあった、以前と全く同じに戻ることはない、ということに私自身ハッとさせられました。単に以前に戻すだけでなく、社会の状況を見ながら、以前に戻すだけでいいのか、ということも意識しながら事業を進めていく必要があると感じました。

大原会長：来年度の計画について、評価の方法に関する意見が多くありました。評価については、これまでの経験から判断するしかないところがありまして、ここ数年のようにコロナや戦争が起きたりすると、今まで評価していたことがひっくり返ることもあります。第二次世界大戦の後などもそうだったのだらうと思います。評価されたりしたりを我々もしてきましたが、それが必ずしも良い方向に向くというわけではないこともわかってきましたので、そのあたりを見極める力が必要なのだと思います。協議会で出た意見のように、必ずしも評価が良ければ良いものではないといった判断も大切かもしれません。特に、博物館だと入館者や論文数、学会発表数などの数値で評価したがる人が多いのですが、例えば目先の研究をやれば、論文数は増えていきます。ただ、特別良い研究というのは数が少なく、10年単位で時間がかかることもあります。そのように、そうした指標では評価できないことはあると思いますので、専門家が目利きになることが大切かと思えます。そのような本質的な評価ができるシステムがあれば良いなと思っています。

《質疑応答・意見5》 予算が0円になっている項目について

佐々木委員：以前もお伺いしたことがありますが、項目の中で予算が0円というものがいくつかあります。「13 人材育成機能の強化と社会貢献」や、「10 道民参加の推進」などは予算が0円になっています。予算がなくても頑張っって進めていく、ということで評価されているの

だと思いますが、今までの評価の中で気になっていたのは、予算が0査定になっているところの項目がいつもちょっと弱いな、と。「6 ミュージアムエデュケーター機能の強化」なども、事業実施後の評価を見るとやはり弱い、ということがありまして、こういった項目は必要不可欠であることは確かですし、なぜ予算がつけられないのか、予算が0円でもできるということにどのような根拠があるのか、教えていただければと思います。

石森館長：私が勤めた10年間の経験からすると、館員は館員なりに博物館をより良くしていくための企画を立ててくれますが、道財政が厳しいですので、簡単には予算を獲得できないのが残念です。本庁では、重点政策などの方向性を定めていますが、そこに博物館がうまく乗れていない状況でした。そのため、館内で予算のやりくりをして、外部資金なども用いながら館員が頑張ってきているような状況です。もちろんクラウドファンディングや積極的な外部資金の獲得も頑張れなどの意見もありますし、科研費も申請できる研究機関ですが、研究資金の確保ひとつとっても、学芸員からすると簡単には予算がつかないということもあります。

どうしても、大きな北海道の枠組みの中で動かさざるを得ないということもありますから、特に私が館長になってから中期目標・計画や基本方針、社会的使命を決めて進めてきております。私としては、北海道博物館として社会的使命や中期目標・計画をしっかりと考えていくべきと思い進めてきました。一方で、予算については道の重点政策に合うように進めているところ です。

大きな枠組みである社会的使命や中期目標・計画などを策定して博物館活動を行っていますが、そのために、博物館が自分の首を絞めるということになっているのであれば、館長として責任が重いなと思っております。

大原会長：予算がついていないところは、項目として上がっていますので、むしろ協議会の先生方は、他県や他館と比べてどうかという目線で見ると、この事業はやらなければならないけど予算がついていないとか、協議会など外部の関係者がこの項目はどうなっているのかと延々と言いつけていけば何か起きるかもしれませんので、我々としては言い続けますので、なぜ予算がないのか、などを議事録に残していきたいと思っております。それによって、予算を増やすのか他のところから持ってくるのかは別の議論になるのかと思っておりますが、少なくとも道民の一人として、こうしたところにも予算をつけるような博物館になっていただければと思います。

小川学芸副館長：少し補足いたします。予算が0円になっているのは、道が組んだ予算の枠組みの上で配当が0円になっているということです。例えば、「6 ミュージアムエデュケーター機能の強化」の中に、「『学校利用ガイド』の編集・刊行」という項目がありますが、ここには予算をつぎ込んではいましますので、実際に1円も使わずに回しているものではありません。ただ、新たに事業項目を起こして予算化するということは、道の予算編成上厳しいので、館内での流用でなんとか調整している面もあるということです。このほか、「13 人材育成機能の強化と社会貢献」にあるような外部の研修などへの派遣も、そうした旅費の費目が見つからないので、全体の調査研究旅費の中から毎年一定程度確保できるよう館内で調整して、ある程度の研修には派遣できるように配慮しています。ですので、実際は0円ではないのですが、予算がついていないという状態の中で、内部努力でやりくりしているという状況です。

逆に、「2 展示」では、見かけ上多く予算がついているように見えますが、石森館長がお話しした重点予算として特別展予算を1000万円持ってきているので、それがほとんどとなっています。重点予算は毎年前年度に申請して、予算獲得ができるかどうか分からないという中でやっています。博物館の特別展は通常数年の準備を経て開催するのですが、当館の特別展の予算としては開催の前年に重点予算を要求してつくかどうか、ということになっています。どんな特別展の企画を考えても、実際に実現できるかどうかは前の年まで分からないということで、展示の計画が立てにくい状況であることは確かです。このように、予算がないというわけではないのですが、構造的脆弱性を抱えていることは間違いないので、引き続き博物館でも取

り組んでいきたいと思ひますし、議事録に委員の先生方からの意見も残させていただきたいと思ひます。

議題（5）野幌森林公園エリアの活用及び北海道開拓の村利活用方針について（報告）

大原会長：それでは次の議題（5）「野幌森林公園エリアの活用及び北海道開拓の村利活用方針について」、説明をお願いします。

塩谷係長：文化振興課の塩谷でございます。議題（5）について私の方から「資料5 野幌森林公園エリアの活用及び北海道開拓の村利活用方針」を用いて御説明申し上げます。

（以下、資料5をもとに説明）

大原会長：ありがとうございます。委員の皆様から御意見がありましたらお願いいたします。

大原会長：北海道博物館のところに、「研究」という言葉は入れられないでしょうか。博物館は研究機関でもあります。収蔵・展示・教育・発信については書いてありますが、北海道博物館は、北海道としては歴史や自然史などさまざまな分野に対して一番研究している施設だと思っています。そのように外の人が見ているかどうか、というのは重要だと思ひます。

塩谷係長：今回の計画に関しましては、博物館、開拓の村、記念広場、ふれあい交流館のそれぞれの施設の特徴を捉えて、今後の取り組みを記載させていただいています。当然、研究の成果がそれらの取組の根底となりますので、研究も踏まえての記載であると考えていただければと思ひます。

大原会長：承知いたしました。

議題（6）その他

大原会長：最後に議題（6）「その他」でございますが、何かございますか。

甲地研究主幹：委員の皆様は、9月5日までではございますが、これまでの協議会の開催スケジュールからすると、今回の協議会が、事実上、現在の任期の最後の集まりとなる可能性がございます。今回の任期の締めくくりとして、皆様からお一言、御意見、御感想、御要望などを自由に御発言いただければと思ひます。

なお、この協議会発足以来、4期8年にわたって委員をお務めいただいた大原会長につきましては、委員の再任規定の関係により、今回の協議会をもって御退任となられる予定です。

大原会長：それでは、お一人3～4分程度で、御発言をいただければと思ひます。発言の順番ですが、名簿の五十音順で佐々木委員から湯浅委員まで御発言いただき、最後に私が発言することをお願いしますとの案が、事前に事務局より提示されていますので、誠に勝手ながら、そのような順でお願いしたいと思ひます。

佐々木委員：北海道博物館は、私たちの博物館にとっては大先輩になります。いろいろ学ばせていただきましたし、これからも学ばせていただければと思ひます。いろいろと意見を言わせてもらっていますが、開拓記念館から考えれば50年を超えているというのは、何者にも変え難い貴重な財産だと思ひます。私たちもそれを目指して博物館をより良いものにしていこうと思ひますので、これからも私たちの先導者として先を行っていただけるような博物館であって欲しいと思ひます。これからもよろしく御願いいたします。

住吉委員：この2年間、いろいろ参加させていただき私自身も勉強させていただきました。私企業で働く立場としてお話した方が良くと考えて、厳しいことを言ったりもしましたが、そこについては御容赦いただければと思ひます。この協議会の日程の調整だとか、事務局の方に御苦労いただいたことに感謝しております。

私自身、この場に参加させていただいたことを光栄に思っています。北海道博物館の施設自体も含めて、北海道の貴重な文化遺産だと幼い頃から思っておりまして、予算の話もあり、文化遺産を維持していくというのは大変なことです。一度なくしてしまうと取り戻せない歴史的な価値があります。さまざまな歴史的な経緯があったにせよ、それは事実として、残していくことが北海道自身の財産になるのかと思いますので、引き続き頑張っただけだと思います。ありがとうございました。

中川委員：これまでお世話になりました。コロナ禍で非常に御苦労されたかと思いますが、うちミュージアムなどの工夫をされたこともありましたし、「アイヌのくらし」展や「北海道の恐竜」展、「世界の昆虫」展などを見させていただいて、本当に迫力のある展示だと思いました。

一つお願いがありますが、現在、私は子どもたちとの関わりの仕事をしていることもあり、ぜひ教育事業に力を入れていただければと思います。「資料1 令和4年度アイヌ民族文化研究センター専門部会議事録」を見た中で、「「受け」や「待ち」の博物館ではなく、「出かける」博物館」というのがあり、これは非常に良いなと思いました。「出かける」というのは、物理的なことだけでなく、コロナ禍でウェブセミナーなどオンラインについて学んだと思います。リアルな凄さをオンラインで伝えるのは難しいとは思いますが、北海道に20万人いる小学生全員が北海道博物館に来られるわけではないので、ぜひ特別展の凄さや迫力をオンラインで子供たちに伝えていただけないかと思いました。例えば、恐竜展では、小林快次先生の5～10分の動画をアーカイブで残していくとか、昆虫展も学芸員の堀さんの熱のこもった説明など、そうしたことをぜひオンラインを通して子供たちに伝えていただければと思います。私も最近、仕事で小学校や中学校に行くことがあります。子供たちはタブレットをどんどん使って、いろいろやっていますので、博物館の圧倒的な昆虫の量や色などが伝わると良いのではないかなど。それをきっかけに、道内の小学生や中学生が、札幌行った時には北海道博物館に足を運んでみようと思えるような、そんな取り組みをリクエストさせていただきます。ありがとうございました。

中村副会長：大原会長、今まで議事進行していただきありがとうございました。大原会長は、ガバナンスの仕組みについて、いろいろなことを館側に申し入れてきました。これはすごい迫力だったと思っています。それと先ほどの評価の話も、計画の評価が全てAでしたが、今千歳アイヌ協会が交付金事業をやっている中で、全部使い切るのではなくて、この点とこの点の予算が余ったと返す方が、疑われることのないひとつの点かと思っています。自己評価は全てAでなくとも良く、大原会長の指摘したように、少し欠陥がある方が良いのかと思います。そうした指摘ができることも含め、大原会長の進行が大いに勉強になりました。

事業報告の中で、アイヌの展示を開催すると入場者数が増えたと報告がありましたが、さけのふるさと千歳水族館でも、アイヌ関連のイベントをやると、5割以上も入場者数が増えるという実績があります。それだけ、先住民族アイヌと認められてきたということですので、そうしたイベントを通じて集客を増やしてほしいというのがひとつの意見です。

村木委員：初めてこの協議会に参加した時から、委員の皆様の厳しい御意見をいただいていたことに、一人の委員としてというより、博物館への意見を自分事として捉え話を聞いていたことも多かったです。ウポポイの運営に対しても、厳しい御意見等々をいただきながら運営をしていますが、そうしたことは内側からはわからないところもありますので、協議会の場は私にとっても勉強になりました。ありがとうございました。

私が博物館に勤めるようになってから30年以上になりますが、右も左もわからないような

状況の時から、開拓記念館の特別展や、講演会、セミナー等に毎週のように通っていた時期がありました。こちらの博物館の研究の積み重ねが展示等々に発揮されているというのは、本当に北海道の博物館を牽引する重要な拠点だと思っていますし、今後もそうあるべきだと思っています。一道民として、この博物館がより発展していく中で、博物館の情報発信など、子供たちが楽しみながら学べるような企画もたくさんあるかと思っていますので、今後尽力していただければと思います。ありがとうございました。

湯浅委員：委員を務めさせていただき光栄でございました。ありがとうございました。

私も大学博物館で仕事をしていますので、大原会長をはじめ委員の皆様の御意見や、職員の皆様の御意見はとても参考になりました。ありがとうございます。北海道の中核的なミュージアムとして、これからも活動を進展していただければと思います。

特に石森先生は、今日の議論でもそうですが、強いリーダーシップがあり、その館長のもとで職員の皆様が仕事されていることも本当に素晴らしいかと思っています。学生にとって、ミュージアムは憧れの職場ですので、そのような場で職員の皆様が学芸員としてお仕事をなさっていることに自負を持っていただきたいです。この評価のシステムも、本当に改善されてきたかと思っていますので、評価を大変な仕事だと思わずに、普段からディスカッションはされているかと思いますが、評価の場を普段の活動を振り返り、今後のあるべき姿を目指すディスカッションの場と捉えて、これからも前向きに利用していただければと思います。今後も活動を応援していきたいと思っています。ありがとうございました。

大原会長：4期8年と大分長くやっていたなと思うのと、結構早かったなと思うのと両方あります。

最初は、佐々木亨先生に会長として議事を進行していただいており、その時に道庁から来た諮問は、評価するシステムを作りなさい、というものでした。私たちは評価する側かと思っていたのですが、評価するシステムを作るのか、というのが最初の頃の議論でした。

その後、竹垣吉彦委員と佐々木会長と、主に3人だったと思いますが、評価システムを形づくりました。これが混沌としたものであったので、博物館にも御迷惑をおかけしましたが、その後どんどんブラッシュアップされていき、非常に分かりやすくなってきた、その経緯が印象に残っています。

あとは、この8年間の中でコロナ禍となりましたので、大分世の中の状況が変わった中で、本当に博物館関係者の皆さんは御苦労されたかと思っています。このあと私は協議会から抜けることになりましたが、来年度からはインバウンドやDX、ICTなど、コロナ禍を経て相当変わるかと思っていますので、ここだけでなく博物館全体として、全国で考えなければならないことではありますが、かなりやることがあるなと思っています。

私個人としては昆虫の研究をやっておりますが、もともと昆虫の標本が好きでこの仕事をしたいと思い、就職先が博物館になって、小樽市博物館から北海道大学総合博物館と、ずっと博物館に関わっていました。北海道博物館はまさに北海道の中核で学生時代の記念館の頃も憧れだった博物館なので、こうして8年も関わることができて、本当に嬉しく思っています。幸せな時間を博物館絡みで使わせていただきましてありがとうございました。

石森館長：委員の先生方からお言葉いただきまして本当にありがとうございます。

私の立場は特別職非常勤ですので、1年ごとに知事からの任命で館長を勤めています。このたび、鈴木知事から来年度もお願いしたいという要請を受けたので、承諾書を本日提出します。私もまた来年も頑張りたいと思っていますので、委員の皆様につきましても、引き続き御支援をいただければと思います。

本日はありがとうございました。

大原会長：すべての議題について協議を終えましたので、本日の協議会は、これをもちまして終了いたします。ありがとうございました。